

阿部彩『子供の貧困—日本の不平等を考える』岩波書店 2008年

第5章 学歴社会と子どもの貧困

・問題提起

「学力格差の底辺の子どもたちの学力向上を図ることは、すべての子どもの『学ぶ権利』を保障するとともに、子ども全体の学力を底上げすることになるのである」(P167L10,11)とあるが、この章では親の学歴の低さが子どもの学力の低さや子どもの貧困にも繋がっているとされている。では、日本の学力底辺の子どもたちの学力を上げるためにはどのような策があるだろうか。

・選んだ理由

第5章のテーマが「学歴社会と子どもの貧困」であるように学歴と貧困は深く関係している。そのため高い学歴を持つには学力が必要になる。さらに P166 図 5-4 の通り日本の学力の低い下位グループは上位グループと比べ、子ども全体の学力が高い韓国やフィンランドとの差がはっきりしているの、日本の学力底辺の子どもたちの学力を上げることが子どもの貧困の解決策に繋がると考えたため。

A班

家庭内の教育を義務化する。その際、一定の基準を設けて、それ以上の結果が得られれば本人にお金などのボーナスを与え、それ以下だった場合、手に職をつけさせるような専門分野を学ばせるように区切りをつけたらよい。

B班

幼いころから勉強を楽しくするために保育所での勉強を取り入れる必要がある。しかし、民営化されていて保育所に通えない貧困世帯の子どもがいるので、その子たちに対しては月に1回近くの小学校に集まって中学生がボランティアとして、文字を書く練習や計算などを教えてあげるよいと思う。また、学力の低い中学生に対しては、大学生が勉強を教えてあげるとよいと考える。現在の日本の財政からみてもこれが一番現実的なのではないかと考える。

C班

義務教育前でも差がついているとあったので、本書にあるヘッド・スタートをしっかりと取り入れる。そのために民営化は廃止するなど、国が保育所への支援を強化する。

D班

意識の格差が子どもの学力に影響を与えているので、この格差をなくすために不安定な雇用情勢をできる限り緩和すべきだと思う。2つ目に本書の「ヘッド・スタート」の中で日本は保育サービスを公的なものにしようとしていたとあるが、今の保育の現状では皆の学力が等しく上昇するのは難しい。たとえば保育の段階から小学校と同様な教育システムにすることで日本の学力水準の底上げを目指すことができると思う。